

第二次世界大戦とアフリカ人 —日本人と戦ったケニア人の場合—

青木 澄夫

はじめに

今年、第二次世界大戦が終結して50年。日本での「不戦決議」の論争を初め、世界各地で、この戦いについての意義が問いただされている。

アフリカの地も、この戦いに決して無縁だったわけではない。多くのアフリカ人が、無意味な戦いに巻き込まれ、戦いの意味もわからないまま命を落とした。

それどころではない。われわれ日本人にとっては、まったく意識下のない第二次世界大戦におけるアフリカ人の存在だが、連合国領だったアフリカ諸国に住む人間にとっては、好むと好まざるとにかかわらず、日本人は倒すべき敵以外の何物でもなかった。

アフリカの歴史を紐解いていくと、日本人とアフリカ人との接点が、思いがけない形で浮かび上がってくる。ここでは、第二次世界大戦で日本人と戦ったケニア人を取り上げてみよう。

ケニアで開戦の報に接した日本人

昭和の初期、といっても10年代半ば、イギリス領ケニア植民地のモンバサで綿布商會を經營していた日本人に、村上大助という男がいる。

1941（昭和16年）年11月、商用のためにナイロビに上京した村上は、さらに奥地の「原住民」から、日本の綿布が欲しいと請われ、トムソン・フォール（現ニヤフル）にまで足を伸ばした。今回の旅には、野生動物を見たいとせがんだ、10歳になったばかりの息子のワタルを初めて同行

し、モンバサの店は妻に任せて来た。

トムソン・フォールに着いた時、村上は祖国「大日本帝国」が、第二次世界大戦に突入し、米英国が敵国になった事実を知った。ところが、このニュースをいち早く入手した村上の使用人は、敵国人村上としては危険と判断し、自動車を奪い、村上親子を野生動物の闊歩するサバンナに置き去りにしてしまう。

モンバサの妻は、すでにイギリス人の手に落ちたであろうと観念した村上親子は、イギリス官憲の追及を逃れるために、さらにケニアの奥地へと向かうはめになる。猛獣に脅かされながら先を進む親子は、突然の犀の襲撃に離れ離れになってしまう。父からはぐれたワタル少年の、「苦難と冒険」の旅物語が、第二次世界大戦の開戦を契機に、こうして始まった。

40代後半以上の方ならご存じの、山川惣治著『少年ケニヤ』の冒頭は、上記のようにワタル親子が、日本からはるか離れたアフリカの地で、第二次世界大戦の開戦の余波に巻き込まれ、離れ離れになるところから始まる。

昭和初期といえば、日本の糸編商社が、モンバサやウガンダのカンバラに支店を置いて綿花を買い付け、一方日本で加工した木綿を大量にこの地で販売していた。安価な日本製木綿は、「土人」用のカンズーやシュカにはもってこいだったのである。モンバサで綿布商會を営む村上大助も、糸編景気に沸くこうした綿製品を扱う一人だったといえよう。この『少年ケニヤ』の話は、フィク

ションではあるが、当時ケニアに在留していた日本人は、モンバサ領事を含め数十人は数えていた。開戦後、イギリス領に在住していた多くの日本人は、行動の自由を奪われ、公館等に監禁状態にされていたという。ケニアにおいても、村上親子のような話は、現実にあってもおかしくはなかった状況だった。

ビルマでの勝利

「今日から諸君は、日本人の主人である」。大英帝国の植民省次官デボンシャー侯爵はイギリス軍服に身を固めたアフリカ兵士を前にして、日本軍を打ち破った彼らの勇気と努力をたたえ、その労をねぎらった。

1945年3月、ビルマ（現ミャンマー）。次官の言葉を疲労し切った表情で聞く黒人部隊の顔ぶれには、東アフリカからの兵士がいた。中央アフリカからの職工がいた。西アフリカの下士官もいた。東アフリカのカンバ民族兵士、若き日のマカウも感慨深げにこの演説に聞き入っていた。

「興亜」のためにと称して攻勢を誇ってきた日本軍のアジア進出は、タイを越え、イギリス領ビルマ・インドへと「死の行進」を続けていた。日本軍だけで死者3万人、死傷者4万2千人にも及んだという、世に愚劣極まると称されたインパール作戦である。防戦にまわった連合軍は、本国からの兵士の調達に困難と判断し、イギリス領だったアフリカ各地から「現地人」を召集し、にわか仕込みの兵士へと仕立てた。その数およそ12万人。主として第81、82西アフリカ部隊と第11東アフリカ部隊が、わずかな数のイギリス将校と共に、日本軍のしぶといゲリラ戦法やマラリヤなどの病気に悩まされ、そして激戦の末に日本軍を打ち破った。「英国の獅子（大英帝国軍）」が、香港で、シンガポールで、マレーシアで日本軍に連敗し、このビルマの戦いだけでも、少なく見積ってイギリス軍の死傷者は7万人、日本軍の死傷者は10万人を越える精力戦ただけに、この戦いには勝利以上の価値があった。日本軍による捕虜虐待も含め、イギリス軍はこの戦いを「忘れがた

い戦争(Unforgettable War)」と呼称した。

ところで、大英帝国の植民省次官が称えたところ、この戦いで「日本人の主人」となったのは、イギリス人ではなく、インド兵士と共に、遙か故郷を離れて戦ったアフリカ人部隊だった。ビルマ訪問を終えてイギリスに帰国した次官は、「アフリカ兵士は、まじめで、敵を前にしても規律正しい態度で臨み、士気は高く、健康であった」と戦争でのアフリカ兵士の活躍を、あらためて誉め称えた。

ケニア兵士マカウの話

ケニア人が、東アフリカのイギリス植民地の軍隊キングス・アフリカン・ライフルの一員として、国外に派兵されたのは、第一次世界大戦の時、現タンザニアにいたドイツ軍と戦ったのを除けば、イタリアのエチオピア侵攻に対して、イギリスがエチオピア国境に兵を送った1940年がはじまりだと言われる。ムッソリーニ率いる当時のイタリアは、ハイレ・セラシェ皇帝の統治するエチオピア帝国に歯をむき出しにして、侵攻しようとしていた。日本はドイツとイタリアの間に三国同



ナイロビの目抜き通りに立つ、2つの大戦のアフリカ人慰霊像。もともとは第1次世界大戦時の死傷者のために建てられたもの。



第2次世界大戦後に、植民地政府が授与した勲章の一部。ここには「ビルマ・スター」はないが左端の「アフリカ・スター」、「1934-1945スター」と同型であった。

盟を結んでいたため、この段階で日本は、東アフリカを含む旧イギリス領の人々にとっては敵国となった。

あるイギリス陸軍少将は、派兵される東アフリカ兵に向かい、日本に対する敵愾心をあらわにしてこういった。「遠くにいるとはいえ、日本人やドイツ人の軍隊をぶちのめして黙らせるまでは、我々にとって決して安全とは言えない」。ほとんどのアフリカ人にとっては、見たこともない日本人が、こうして憎むべき敵となった。

ムゼー・マカウ（マカウ老人の意）もキングス・アフリカン・ライフルの一員だった。ムゼー（老人）は1922年生まれ。ケニア中央部の半乾燥地キツイの出身で、今年73才になる。がっちりした体付きと、いまだ薄れていない記憶力は、かつての精悍だった青年兵士を彷彿とさせる。

第二次世界大戦が発生した時、マカウ青年は植民地政府が軍人を募集していることを知った。兵士の採用は「自発的」応募によるといわれていたが、実態は各県知事(District Commissioner)による徴兵が主流だった。それでも20才で白人家庭の使い走りをしてきた彼にとって、兵士の給料は魅力的だった。親は白人の小間使いよりもと、入隊に反対はしなかった。ただアフリカ人の場合、どんなに望んでも軍隊での最高地位は、軍曹どまりだった。

イタリアがエチオピア進攻を始めたときには、

ソマリアのモガデシオに行った。この頃軍隊の上層部からイタリア人と組む日本人やドイツ人は悪いやつだと聞いた。中国人はイギリス人の仲間だからちょっと友達だとも聞いた。

ソマリアから戻ってしばらくして、今度はセイロン（現スリランカ）に行った。日本がビルマに進出し始めたからで、1944年の2月から6ヵ月間実戦に備えて演習に行った。いったん帰国後、同年の10月モンバサからセイロン経由でビルマへ向かった。第11東アフリカ部隊の一員として日本軍と戦うためだ。国には結婚したばかりの妻と生まれたばかりの息子を残した。出征のたびに亡くなる兵士もいたので、親は今度は心配したが、月80シリングの手当では説得力があった。仲間と自分と同じカンバ民族の人が多かったのも心強かった。戦闘の時以外には、車両の修理を担当した。修理技術は軍隊の訓練中に習ったものだ。

戦争は恐ろしかった。敵は怖かった。爆弾も降ってきた。雨もやたらに多く、ケニアにはない濃いジャングルが行く手をさえぎった。銃弾に倒れるのはもちろんのこと、マラリアや熱病にやられる仲間も多かった。

「日本人なんて噂には聞いていたが、国を出るまでは見たこともなかったよ。連中は強かったな。特にジャングル戦には、きりきり舞いさせられたものだよ。木の上から鉄砲の弾が飛んでくるなんて、考えもしなかったからな。それもたった二人の敵のために、散々な目さ。白人の将校は、日本人にねらわれないために、顔を黒く塗ってアフリカ人のまねをしたものさ」。

帰国できたのは戦争が終結してから大分たった1946年の1月。ムゼーには勲章「ビルマ・スター」が植民地政府から贈られた。赤みがかかった勲章は、式典のたびに胸につけていたが、いつの間にか子供のおもちゃになったりして、どこかへいってしまった。

軍隊生活では車の修理や銃の使い方を教わったが、読み書きの大事さを痛切に感じた。だから、これからは教育が必要だと、みんなに呼びかけて、地元キツイに学校をつくった。教会も建て

た。学校へ行けなかったムゼーだったから、11人もいる子供全員に教育を受けさせてやれるのが一番嬉しかった。

今では復員後始めた商売を、キツイで息子が後を継ぎ、孫たちも大きくなった。戦争が終わってからは、「一度だってケニアの外に出たことはない。その必要がないからね」。時々180キロ程離れたナイロビにいる娘や息子、それに孫に会いに来るのが楽しみだ。

「日本は文化も産業もすばらしい。その技術をケニアの若い者にもっと教えてやってほしい」。娘がJICA事務所で秘書として働いているだけでなく、地元でJICA専門家が植林技術を普及していることを知っているためか、ムゼーの日本への関心は高い。

「日本では、あの大战でアフリカ人が駆り出されて日本人と戦ったという事実を知る人は少ないですよ」と伝える筆者に、「昔は日本人は敵だったが、今は友達だ。でも、こうやってお互いの歴史を正しく伝えていくことは、とても大事なことだよ」。歳月を感じさせるごつごつした手で、筆者の手を力強く握りながら、ムゼー・マカウはしゃきと背筋を伸ばし、愛娘ジャクリンと自らに言い聞かせるようにうなづいた。

誰のための、何のための戦争

ムゼー・マカウが感じたように、実際にビルマで参戦したアフリカ兵士の目に映った日本人は、イギリス人が力説する「危険」な印象とは少し違っていた。東京大学に籍を置いたことのあるケニアの歴史家シロヤ教授は、この戦いに参戦したケニア人復員兵の声として、「日本人は、アフリカ人を殺傷することにためらいを感じていた」と言いきる。

「日本人は戦闘の場や自らを守らなければ自分が殺されると

いう場合以外、つまりまったくやむを得ない状況に置かれたとき以外は、アフリカ人を殺すことはなかった」。発言は、同教授がインタビューした複数の元ケニア兵士のものである。「アフリカ人兵士が偵察や斥候に出かけた際、日本兵士と出くわすこともたびたびあったが、例えアフリカ兵士を殺すことができる状況であっても、日本兵士は彼らの命を奪うようなことはしなかった」。「日本人兵士は、黒人に対してむやみやたらに発砲しなかったから、イギリス人将校は自ら靴墨を顔に塗り、アフリカ人から「目立たない」ようにした」。

このように、ケニア兵士は日本人兵士に極めて好意的な解釈を行ったが、イギリス将校の目には必ずしもそうは写らなかった。日本兵士は、アフリカ人兵士を恐れていたというのである。彼らによれば、日本人兵士の間には、「戦場に潜伏しているアフリカ人兵士は、歯の先端を研いでいる」という噂がたっていた。これは、アフリカ人が日本人を食おうとしていることを意味したから、「殺されて、黒人の腹を経てからあの世に行くのでは、先祖に会わず顔がない」と考えた日本兵士には、ショッキングな話だった。だから、ジャングルの中で突然アフリカ兵と出くわすと、ライフルを捨て、ヒステリックに悲鳴をあげながら逃げたしまったという。



カンパ元兵士ムゼー・マカウと娘のジャクリンさん。

元ケニア兵士たちは、日本兵士は人種差別観は持っていなかったと信じていた。激戦の末、連合軍の捕虜になった日本人もいたが、そのうち数少ないながらも英語の話せるある日本兵士は、捕虜の身でありながら、世話をしてくれるアフリカ人の兵士に向かってこう諫めた。「君らはまちがった側に立って戦っている」。日本人とアフリカ人の兵士たちは、声をひそめながら会話を交わした。日本人捕虜は続けた。「アジア人とアフリカ人が協力して、アジア・アフリカの地から白人をたたきだそう」。「我々日本人は、そのためにこうして戦っているのだ。諸君も国へ帰って、アフリカから白人を追い出すべきだ」。

アジアでの日本軍の侵略と略奪の歴史、またその後の日本政府のアフリカ諸国との希薄な関係を振り返ってみると、アフリカ人に非白人としての親しみを感じさせる日本人捕虜の発言も、いかに現実とは異なり、またいかに空虚で実体なかったかは明らかであるが、こうした戦いについての「問いかけ」は、アフリカ兵には、新鮮にまた意味深いものとしてとらえられた。

後の「マウマウ闘争」の勇士となるケニア兵士イトテは、この戦いを一緒に戦ったイギリス兵士から、日本兵士とは違った意味で、この戦いの「意義」について問いただされていた。「俺は大英帝国の利権を守るために戦っている。なのに君

Serial No. 101599	E.A. Form B.108	CERTIFICATE OF SERVICE
WARNING		
If this Certificate is lost or mislaid no duplicate will be Issued. Any alteration fo the particulars given in this Certificate will render the holder liable to prosecution and to confiscation of the Certificate.		1.R Regimental No. (and Prefix)
Any person finding this Certificate is requested to hand it in to any Post Office, Police Station or District Commissioner's Office for transmission (post free) to the Officer-in-Charge, East Africa Military Records, NAIROBI.		2.R Christian Name (a)
HATARI		Surname (a)
Tunza sana cheti hiki, kama ukikiweka ovyo ovyo na kikipotea hutaweza kupewa kingine. Usibadili maneno yaliyoandikwa katika cheti hiki hata kidogo, kwa sababu kama ukibadili neno lolote katika cheti hiki, utash takiwa na utaweza kyunyang'anywa cheti hiki.		Name (b)..... s/o (b)
Mtu yeyote akikota cheti hiki, ni lazima akionyeshe katika Posta Ofisi yoyote au Stesheni Polisi au kwa Bwana D.C. na gharama ya kupoleka cheti hiki itakuwa bure tu kwa Officer-in-Charge, Military Records, NAIROBI.		3.R Enlisted at
CHIDZIWITSO		4.R Date of Enlistment
Sungitsani bwino Satifiketi limeneli, cifukwa ngati litaika palibe kupatsidwanso lina. Palibe kanthu kali konse kamene mungasunthemu Satifiketi limeneli, ngati munthu asuntha, adziwe kuti ali ndi mlandu, ndipo kapena adzamangidwa, ndi kulandidwa.		5.R Nationality (c) Colony of Origin (d)
Munthu aliyense amene angatole Satifiketi limeneli aenera kulipereka kwa Post Office liri lonse, kapena kwa Polisi Stesheni liri lonse, kapena kwa D.C. aliyense kuti alitumize kwa Officer-in-Charge, East Africa Military Records, NAIROBI. (Lidzatumizidwa popanda kulipira.)		6.R Place of Birth (c) District of Origin (d)
OKULABULA		7.R Caste / Religion (c) Tribe (d)
Singa ebaluwa eno ekubulako, toyinza kufuna ndala. Singa okyusa ekimu ku bigambo ebiwandikidwa mu yo, oyinza okutekebwa omusango munene, era eyinza n'okukugyi-bwako.		8.R Country (c) Chief (d)
Omunto alonda ebaluwa eno asababibwa agitwale mu Posta Ofisi yona, oba e Polisi Stensheni, oba ewa D.C. esobole okuwerebwa mu posta awatali stampu, ew'Omukulu wa East Africa Military Records, NAIROBI.		9.R Province (c) Sub-Chief (d)
Note. -- Sections or Pages marked "R" will be completed by Records Officer. Sections or Pages marked "U" will be completed by Units or Discharging Authority.		10.R District (c) Headman (d)
		11.R Civil Identification No. and Prefix (if any) (d)
		Note. --To be completed only in the case of --- (a) Europeans (b) Asians and (c) Asians Mauritians Africans (d) Africans Seychellois
		12.U Flat impression of right fore, middle and ring fingers taken simultaneously
		

東アフリカ軍の兵役証明書。注意書きは英語とスワヒリ語のほかに、ブガンダ語(?)とチェワ語(?)でかかっている。

はいったい何のために戦っているのだ」。ケニアと同様イギリスの植民地であるインドを通過した際も、東アフリカに住んだことのあるというインド人から、同様の質問を受けた。「我々は今度の戦いに勝てば、インドの独立が約束されている。君らはいったい何を約束されているのだ」。

慣れない東南アジアの湿潤のジャングルの中で、黄色い顔の日本兵士による奇襲におびえながら戦ったこの戦争に、多くのアフリカ兵士は次第に疑問を感じ始めていた。「俺はいったい何のために、誰のために、こんなところまで来て、日本人と戦ったのか。いったい何のために、誰のために」。

民族の自立に向けて

数年間にわたる軍隊・闘争生活において、ケニア人が失ったものは、時間や人的資源ばかりではなかった。働き手をなくした耕作地の荒廃や家庭の崩壊など、その損失は測りきれないほど大きかった。

しかしながら、ケニア人がこの戦いで得たものがなかったわけではなかった。ほかの地域のアフリカ人や外国人兵士との接触で知り得た新しい知識や、訓練中に習得した技術を通じ、イギリス側がまったく意図していなかった「民族自立への意識」の芽生えである。

東アフリカ兵士がケニアの地に復員して6年後の1952年、ケニア人による大がかりな独立闘争が、キクユ民族を中心にして起こった。いわゆる「マウマウの乱」と呼ばれているこの闘争で、アバディアの森にこもったケニア独立の闘士は、白人や植民地政府に協力するケニア人を襲い、植民地社会に大きな戦慄を与えた。この戦いには、あ

のビルマでの「大英帝国のための戦争」の意義に自問した元戦士も、重要な地位で参加していた。

7年間にわたるこの闘争は、1963年に、イギリス政府にケニア独立を認めさせた大きな要因となったが、その森でのケニア人の戦いは、あのビルマの森で連合軍を悩ました、日本軍の「ジャングル戦」のやり方をまねして実践したものだということ。

カンバの兵士ムゼー・マカウが、日本人との戦闘の代償として、植民地政府から授与された勲章「ビルマ・スター」は、現在わずか10イギリス・ポンド（約1500円）で取引されている。

本稿は（社）青年海外協力協会刊行の『スプリング・ボード』13号（1995年4月）に執筆した「日本人と戦ったケニア人—イギリス兵士という名のアフリカ兵士」を加筆修正したものです。

参考文献

- Hickey, Michael 1992 *The Unforgettable Army*, London: Spellmount.
- Itote, Waruhiu 1967 *Mau Mau General*, Nairobi: East Africa Publishing House.
- Ochieng', W.R. 1985 *A History of Kenya*, Nairobi: Macmillan Kenya.
- Shiroya, O.J.E. 1985 *Kenya and World War II - Afircann Soldiers in the European War*, Nairobi: Kenya Literature Bureau.
- 吉田昌夫 1978『アフリカ現代史II 東アフリカ』山川出版社。

（あおき すみお 国際協力事業団）